平成28年（2016）
阿づまの光
5月号・Majo

教主さまお作 灰釉茶盌 銘「高砂」

【金龍海大八洲土・二代教主さまお手植え神島松釉】

題字出口直日
通巻第566号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

天命を楽しむ

総務管理課長 藤本 光

若葉萌える新緑の季節を迎えました。社会一般的に4月は新年度の始まりで、新しい環境でのお仕事、生活を迎えた方も多くいらっしゃると思います。

私など大本本部の奉仕者は、綾部・亀岡・東京本部、また地方での活動が主体の特派宣伝使等、それぞれの場でご奉仕させていただいています。そんな中、当然ですが時折人事異動の発令があり、この4月にはここ東京本部でも複数の異動がありました。

大本のみ教えの「四大主義」に〝楽天主義〟があります。尊師さまは「楽天と申しますのは、これは天命を楽しむという意味であります。天命、これを「性（せい）」といいます。つまり惟神（かんながら）の、それぞれ与えられた天職使命、それが「性」であり、天命である。命はおいいつけであり、すなわちいのちであります」。（信仰叢話）

私自身もこれまで何度が人事異動を経験しましたが、その都度この尊師さまのお示しを思い出し「今回の人事異動は天（神さま）からのいいつけである。心機一転、少しでもお役にたてるようさせていただきたい」と肝に命じます。しかし実際には慣れない、わからないことだらけで気持ちだけが先走り、何からどうしてよいかわからない状況に陥ります。そんな時でもありがたいことに、私たちは歴代教主・教主補さまのお示しを拝し、救われることがあります。

三代教主さまは「どんなに困っていても、いたずらに心配してみたところで、しようのないことです。神さまを真剣に拝ましてもらっておれば、必ずお救いいただけるものです」。（寸葉集 巻一）

また尊師さまは「なすべきことはちゅうちょなく、次々にと片づけてゆく癖をつけたいものである。その時やらねばならぬと思うことを、精一杯やっている時には、心身に多大の悩みを受けている時でも、その奥底に言い知れぬ清涼さがあり、ほがらかさがある」。（信仰雑話）

これらのお示しを胸に、今一度、自身の足元に眼を向けて精進させていただきたいと思います。

今月の聖言

天地（あめつち）の神の大道（おほぢ）にしたがへば
一さい万事楽しみとなる

出口王仁三郎聖師

oomoto 公開講座

大本とは①
～開教の現代的意義～

東京宣教センター次長　猪子（いのこ）　恒（ひさし）

開教

大本は、1892年（明治25年）2月3日の節分、京都府綾部市で開教しました。極貧の生活を送っていた初老の女性、出口なお（開祖）に国祖（こくそ）・国常立尊（くにとこたちのみこと）が艮（うしとら）の金神（こんじん）の御名により帰神（神がかり）し、三千世界（現界・幽界・神界）の立替え立直しとみろくの世の実現を啓示したのです。

大本では、天地万有を生成化育し霊・力・体を司る独一真神・天御中之主大神（あめのみなかぬしのおおかみ）（一名・大国常立大神）をはじめ、大地を修理固成された厳霊（げんれい）国常立尊、瑞霊豊雲野尊（ずいれいとよくもぬのみこと）、その他もろもろの天使（神）を「大本皇大神（おおもとすめおおみかみ）」と仰ぎ祀っています。

大本は教団名に〝教〟をつけません。大本の発端である「お筆先」に大本は世の〝大本（根源・根本）〟になるところと記され、たくさんの中の一つではないからです。

また、大本には、「万教同根」という思想があります。どの宗教も辿ると根源は一つという教えです。主神をゴッド、アッラーなど呼び方が宗派によって違いますが、元はすべて同じであるということです。これは大本の大切な神観です。

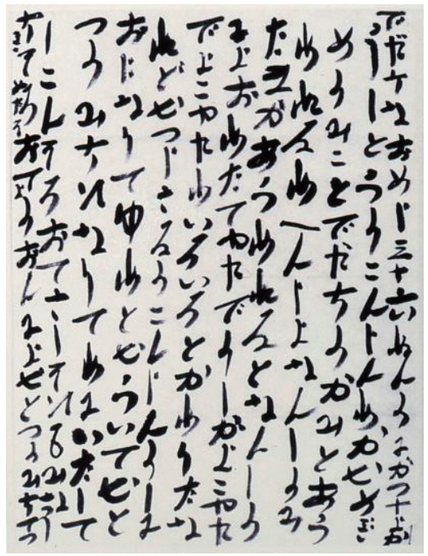
帰神

出口なお開祖は、天保年間の大飢饉の時代に生まれ育ち、20歳になる前に養女として出口家に入ります。しかし、結婚を境に、開祖は多くの苦労を重ね、生活はとても貧しくなっていきます。そんな中で艮の金神が帰神したのです。開祖の末娘の出口すみこ二代教主は、当時の様子について、幼い記憶の中から次のように言い残しています。

「ご開祖の神がかりをみられたことのない人には想像できませんが、ふだんはやさしい、ものしずかな教祖さまが、神がかりの時は腹の底から凛とした、誰しも聞けば身の緊（し）まるような、輝くような力強いお声がほとばしり出たのであります」（おさながたり）

お筆先のはじまり

帰神後、開祖は周囲から狂人扱いされ、ある時、座敷牢へ入れられてしまいます。そこで開祖は、自身に帰神している艮の金神に向い、「神さまのお道を広めて欲しいと言うけれど、こんな座敷牢に入っていたら、それができません」と訴えます。すると、艮の金神から、筆を持つよう伝えられます。しかし、開祖は無学文盲で、字の読み書きができません。ところが、神に命じられるがまま座敷牢に落ちていた折れ釘を持つと、手が勝手に動き、柱に文字を書き出したのです。この自動書記が「お筆先」の始まりと伝えられています。



「お筆先」

※六朝体＝六朝時代に行われた書風

救いのお諭し

「お筆先」の書体は、※六朝体に似た独特のもので、約27年間に半紙20枚綴りを一巻（冊）として、延べ一万巻（冊）書かれます。初期から最後まで、筆圧が変わらず、あたたかさに満ちあふれ、その書体からは、いつも同じ精神状態を保って書かれていることが推察できます。文字はひらがなと漢数字のほかに、〝上、小、大〟などの漢字が用いられています。文体は断言的で、一文字も書き直しはありません。

内容は、神の経綸、預言警告、神の御心、立替え立直し、救世主出現、みろくの神世、日常生活のあり方、国祖の隠退と再現などについて記され、神意に反した表現として「けもののよ」「つよいものがち（弱肉強食）」「われよし（利己主義）」などの言葉が使われています。

しかし、「お筆先」の一番の要点は、善と悪との戦いにより、一旦は乱れた世が来ることと、日本の役割や日本の精神（大和魂）の復活で、全人類が改心し、神心になれば「みろくの世」が到来するという、神さまからの救いのお諭しであることです。

王仁三郎聖師「大本入り」

二大教祖の一人、出口王仁三郎聖師（当時は上田喜三郎）は、26歳のとき、神の使者に導かれて京都府亀岡市の霊山・高熊山で一週間の霊的な修業をしました。その後、聖師は、「お筆先」を目にすると、この内容が高熊山修業のときに、自分が見聞した内容と共通していることに気づき、綾部の開祖を訪ね、聖師は「大本入り」します。その後、二代教主との結婚を機に、出口王仁三郎と改名し、開祖とともに、大本の基礎を築きました。

聖師は「お筆先」の神意が正しく理解されるようにと、原文のひらがなに漢字を当て、当時の大本機関誌で発表しました。それをまとめたものが大本の二大教典の一つ『大本神論』全七巻になります。（『霊界物語』とともに根本教典とされている）

『大本神論』の預言や警告は、現代に照らし合わせると、ぴったりと重なります。そう考えると『大本神論』に示された「みろくの世」が来ることも信じることができます。

「是（これ）では、国は立ちては行かんから、神が表に現われて、三千世界の立替え立直しを致すぞよ。用意を成されよ。この世は全然（さっぱり）、新（さら）つの世に替えて了（しま）うぞよ。三千世界の大洗濯、大掃除を致して、天下太平に世を治めて、万古末代続く神国の世に致すぞよ。神の申した事は、一分一厘違わんぞよ。毛筋の横巾ほども間違いは無いぞよ。これが違うたら、神は此の世に居らんぞよ」（大本神論・明治二十五年旧正月）

現代から見る

出口直日三代教主は、世界の情勢を凝視すると、人類は峻（けわ）しい峠に向かって歩ませられている。しかしながら、神の理想に向って前進しつつもあると示されています。神さまの理想である「みろくの世」「地上天国」は、徐々に近づきつつあるということになります。そして、今なお続く国と国との争いや宗教間での争い、世界規模の問題などは、「みろくの世」へと向かう最中に、清算されるべきもののアガキとして、現代に放出させられていると教示しています。

本質をみつめて

大本で理想とされている政治は、貧富の差が縮まることで、たとえば産業であれば、お金のためではなく、人のため、社会のためのモノづくりを本質とするべきだと説いています。

経済は、「経世済民（けいせいさいみん）」という言葉に由来し、世を治めて、人を救うことが〝経済〟の本来の意味です。この言葉のとおりになることが、大本の理想なのです。

また、教育においても、テストの点数や知識重視ではなく、人の心を育てることが大事になっていきます。そのためには、実地・体験教育が必要だと思います。現代のインターンシップですね。実際に現場でそのことを体験して、経験を積ませる教育の方が心を豊かにし、長い目でみれば人生全般に生きてきます。

原点回帰

これから日本、世界はどこに向かうのでしょうか。「われよし」「つよいものがち」という自己本位の世の中が進み、心が軽んじられ、モノ・カネで動いている近・現代に対し、三代教主は「宗教はもとより、政治、教育、産業、経済の一切の精神が改められる」と示しています。

そのためには、私たちの一人ひとりの「われよし」「つよいものがち」を無くす改心が一番大事です。そうして、モノを作り出す大地・お土・農業が見直されなければなりません。

大本の歴代教主は、日本、世界の立直しは、〝お土〟から始まると教えています。

開祖は、「お土があるから皆が生きて居られるのじゃ。百万円の金よりも一握りのお土の方がどれほど大切なのか分からぬのじゃ。金は滅びのもとじゃぞよ。世界中の人にこれが解ったら、これがみろくの世になるのじゃ」と示され、お土の尊さを伝えました。これは、世の中が原点に戻ることを意味します。

聖師は、「一切のものは工業でも商業でも農からはじまる。百姓は造化の神と一緒にはたらいている」と示され、農業の重要性を説きました。

「政治は、百姓を大切にしてこそ、ほんとうの正しい政治が行われるのです。農を中心にしてこそ、国の経済も文化も、本当に立直るものです」と三代教主は示されました。

神さまは、人類を守りたい一心で、救いの道を諭しています。私たちにできることは、原点に立ち返ることではないでしょうか。

掲載文は、平成28年1月20日に航空会館（港区新橋）で開催した「大本公開講座」講演録の要旨です。

東光苑観桜茶会

東光苑観桜茶会は、3月27日午前10時30分から、東京宣教センター・東光庵で催され、33人が入席。薄茶席では髙野社中が担当し、抹茶を振る舞った。

当日は、肌寒い天候ではあったものの、時折、晴れ間から降り注ぐ日差しが暖かく、入席者は日常の喧噪から離れて、一服の薄茶とともに静かなひとときを過ごした。

また、応接室では歴代教主・教主補さまのお作品展示が行われた。

新入信徒研修会（春の集い）

新入信徒研修会（春の集い）は、4月3日午前9時30分から、東京宣教センターを会場に開催され、遠近各地から11人が参加した。

参加者は、実習「お礼拝の仕方とその心得」「大本宣伝歌」、講話「大本の使命」「祝詞の意味～神さまへの感謝と祈り～」「ご神書拝読の仕方」を受講。また、愛善歌の実習、茶席入席、お作品拝観、歓ぎの座など、参加者は全体を通して、信仰生活における基礎的な内容を幅広く学んだ。

参加者からは、「同じ境遇の方々と触れ合うことができ、良い刺激を受けた」などの声が寄せられた。

ご神徳談に花が咲いた（歓ぎの座）

東光苑春季大祭

東光苑春季大祭は、4月10日、午前10時30分から、斎主・出口眞人氏のもと執行され、320人が参拝した。

祭員は各主会祭務部長、少年祭員は東京主会の涌井三四郎くん、茨城主会の吉田亜郁くん、伶人は宮咩会関東支部、大本神諭拝読は佐藤榮栃木主会次長、添釜は髙野社中が担当した。

祭典後、浅田秋彦本部長があいさつに立ち、『人類愛善会国際ネットワーク』が立ち上げられることを機に、人類愛善会タイ分会が設立することについてふれ、「聖師さまのご思想が、海外で広がりをみせるようになり、神さまのお仕組の深さを思うと同時に、大本・人類愛善会の使命が、今後、ますます大きくなってくる」と述べた。

次いで、あいさつに立った出口眞人氏は、亀岡保育園での愛善保育理念について「在園児は信徒子弟以外が多いが、給食前にはみんなで〝三首のお歌〟と共に、〝好き嫌いなく残さず食べます〟と唱和してお箸をとっている。これで実際に食べ残しも減った。また、夢や希望と共に〝志〟を持った生き方のできる人として育って欲しいと、そんな〝志教育〟にも取り組みを始めている」と述べた。

その後、能舞台では宮咩会関東支部による八雲琴『琴の由来』が奉納された。

現代は〝志〟が欠けている

参拝者は静かに聴き入った

大本公開講座

「第158回大本公開講座」は、4月20日午後7時から、港区新橋の航空会館で開催され、藤原直哉株式会社あえるば会長・エコノミストが「ますます広がる21世紀の新しい社会～立替え立直しの時代を元気に生きる道～」と題して講演した。参加者は45人（内、一般16人）。

講座では、立替え立直しが進む現代社会について、「人々の心は、大自然（神）の恵みからかけ離れ、〝今だけカネだけ自分だけ〟の世の中をつくっている。一人ひとりが、生命の根源（大宇宙）を実感して生き、自分の役割を自覚することが必要である」と述べ、「日本の原点である農業を見直すことが、21世紀の〝共生社会〟につながる」と結んだ。

参加者からは、「混迷した世の中で、自分がいかにあるべきかを考えさせられた（男性・一般）」等の声が寄せられた。

積極的に〝行動〟することが重要

東光苑祭典・行事予定

5月

4日（祝・水）午前10時30分執行
教主還暦慶祝梅松祭
三代教主・教主補聖誕祭

5日（祝・木）午前10時30分執行
開教124年 みろく大祭遥拝祭

8日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭

18日（水）午後7時～8時30分
大本公開講座（航空会館・港区新橋）
講題 患者の力を身につける
～がんの時代を生き抜くために～
講師 加藤眞三（慶應義塾大学看護医療学部教授）

6月

12日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・人類愛善会創立記念祭典・市杵島姫命例祭

15日（水）午後7時～8時30分
大本公開講座（航空会館・港区新橋）
講題 祝詞のこころ
～感謝と祈り～
講師 西山桂一郎（大本青年部長）

26日（日）午前9時30分～午後4時
東京本部直属信徒研修会

大本東京本部ホームページ
URL http://oomoto-tokyo.com